

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第66号 平成22年11月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351

図書館屋上から大倉山公園を望む ▶



大倉山公園

西洋人の目から見た日本

ハロルド・S・ウィリアムズは、一九八七年に神戸で亡くなるまでの約六十年間を貿易業の傍ら、膨大な資料（切り抜きやメモ・書簡など）の収集に費やしました。

その内容は、多岐にわたり、期間は江戸から戦後に至るまで、同時代の貿易商人・外交官などのほか、三浦安針・フェノロサ・川上音二郎といった私たちに馴染みのある人物も多く、軽井沢・長崎や野球・ビール・芸者・捕鯨などと、その興味の幅広さには驚かされます。

神戸に関するものは、居留地の素人劇団・神戸の倶楽部・神戸婦人倶楽部・ユダヤ人コミュニティ・英ミッションスクール・国際学校・フリーメーソンリー・製鉄関係・製紙関係・教会・外国人墓地・新聞（ヒョーゴニュース他）・競馬・ゴルフ倶楽部・オリエンタルホテル・トアホテル・六甲山・塩屋・須磨・垂水・舞子・明石・ジエームス（山）などがあります。

資料は、オーストラリア国立図書館に寄贈され、一部がマイクロ化されました。当館では、そのマイクロフィルムを閲覧することができます。

島尾敏雄日記―『死の棘』までの日々 島尾敏雄(新潮社)

終生書き続けていたといわれる日記のうち、作家の出發期として重要な時期であるにも拘わらず全貌が掴みがたかった一九四五年から一九五一年までの記録。神戸復員から、結婚、神戸市立外事専門学校辞職、作家生命を賭しての東京移住までの七年間である。

初出は『新潮』だが、誌面の都合上、掲載できなかった部分や新たな校注が追加され、極めて貴重かつ興味深い資料となっている。

KOBE cinema map―神戸シネマップ 神戸フィルムオフィス編・発行

豊かな自然、歴史的な街並みや情緒ある下町など多様な魅力にあふれる神戸では、映画やドラマの撮影が行われることも多い。それらの作品とロケ地を、旧居留地、南京町、地下鉄海岸線沿線など五つのコースに分けて、紹介するガイドマップ。

「ノルウェイの森」や「GANNIZ」など、これから公開される映画も含まれているので、鑑賞とあわせての散策もお勧めしたい。

穰治君への手紙―くるま椅子の詩人の青春 高橋夏男(編集工房ノア)

大きな瞳で“平野のトンボ”と呼ばれた兵庫区出身の詩人、阪口穰治。重度の身体障害を持ちながら、わずかに動く二本の指で詩を生み出し、ささやかな幸せをかみ締めながら生きる喜びを綴った。

「…かぞくの あいは／じぶんの いのちの すべて。」と言いつつ、懸命に生きることで、家族の無上の愛に応えようとした一生だった。著者は、思い出を手繰り寄せ、阪口の三十一年間の短い生涯を生きたきとよみがえらせた。

引用された多くの作品からは、彼の優しい人柄や熱い思いが、直に感じ取れる。「慈愛」とは「生きる意味」とは。大切なものを教えてくれる。



ふるさとの巨樹・名木 神戸新聞総合出版センター編・発行

歩いている時や、車で通りすがりに、突然目にはいつてくる大きな樹。その存在感に圧倒され、原初の森へと導かれるような気持ちになったことはないだろうか。

兵庫県の巨樹・名木を集めた本書を開くと、「あ、この木！」とわかる旧知の木を見つけることがある。樹齢や大きさ、いわれを知ると、ますます畏敬の念がわいてくる。そして再び、その大きな樹下に立ちたくなってくるのだ。

明石理香のおいしい兵庫―全て兵庫県の食材を使った”地産地食”のアイデアレシピ。 明石理香(デイ・フリーク)

日本海と瀬戸内海に挟まれ、中国山地が東西を横切る兵庫県は、豊かな食材に恵まれている。県内には三十箇所の「道の駅」があり、そこには新鮮な野菜や海産物がそろっている。

料理研究家の著者が、「道の駅」で見つけた兵庫県の元気な食材を使って、現代風にアレンジした伝統料理やお袋の味を紹介している。

白系ロシア人とニッポン コ・ピョートル(成文社)

一九一七年十月、ロシア革命でソビエト政権が成立する。この混乱を逃れ、他国に亡命した人々が、白系ロシア人。本書は、来日した白系ロシア人を移住や亡命の時期によって分類し、その特徴や相違点をまとめたもの。

亡命者は、二百万人ともいわれるが、来日した人々は千数百人。欧米諸国より少ないのは、日本に対する情報不足が要因であった。居住先も、西欧化された東京や横浜、神戸、気候風土の近い北海道であった。神戸のロシア人といえ

ば、洋菓子のモロゾフやゴンチャロフが有名だが、神戸外国人墓地には、百八十人以上の白系ロシア人が眠っている。

亡命者を調査し、その生き方や考え方を学ぶことは、日露交流の発展や「国際化」という情勢のなか大きな意義があると著者は言う。

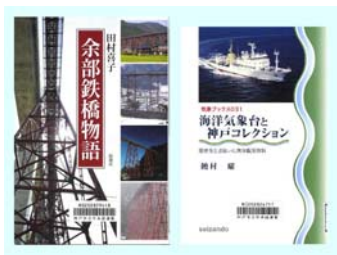


海洋気象台と神戸コレクション—歴史を生き抜いた海洋観測資料 饒村曜 (成山堂書店)

神戸コレクションとは、二十世紀前半に日本の船舶で観測された約六八十万通に及ぶ海上気象記録で、神戸海洋気象台が収集・保管を行っていた。世界ではあまり残っていないが、日本では幸運にも震災や戦災の被害を免れ、極めて貴重な記録群となっている。この記録によって世界中の気象変化が追跡でき、今後の異常気象発生の予測にも貢献している。

また神戸コレクションは船舶の航路調査にも使われる。例えば神戸からブラジル移民を運んだ「笠戸丸」の航路復元も可能で、移民の実情研究にも役立つ。

本書は海洋気象観測史と神戸コレクションの関係を、多方面から面白く紹介している。



余部鉄橋物語 田村喜子 (新潮社)

余部鉄橋。その高さ四十メートルを超える赤い橋脚は見る人を圧倒し、貴重な近代化遺産として多くの観光客を集めてきた。

しかし、昭和六十一年の列車転落事故以降、強風時の列車運行の維持や、潮風による橋の腐食を防止する策が検討され、遂に橋の架け替えが決定された。

そして、平成二十二年夏、余部鉄橋は九十八年に及ぶその役目を終えた。これは、余部鉄橋の一生の物語である。

神戸で秀吉と出会う 神戸市教育委員会編・発行

今年六月から八月まで神戸市立博物館で開催された企画展の図録。

秀吉は、天下統一を目指す織田信長の家臣として、東播磨を転戦した。兵糧攻めで有名な三木合戦などに勝利し、播磨をほぼ支配下におさめた秀吉は、その後荒廃したこの地域の復興に努めている。

また、天下人になってからは有馬温泉の復興にも尽力、自身の御殿を建造し、たびたび湯治に訪れた。神戸における秀吉の足跡をたどることができる。

神戸における秀吉の足跡をたどることができる。

|| その他の新刊 ||

窓の微風—モダンズム詩断層 季村敏夫 (みずのわ出版)

沖繩(うちな)—耽溺者(ジャンキー)

—南輝子歌集 南輝子 (ながらみ書房)

山陰海岸ジオパーク 下雅意敏写真

神戸新聞但馬総局編 (神戸新聞総合出版センター)

だから、あしなが運動は素敵だ 玉

井義臣 (批評社)

一の谷合戦でしかけた義経の陥穿

(わな) 梅村伸雄 (新人物往来社)

書庫探訪 その22

『兵庫築島伝』 呑一 豊稔 円信 天明元年 (1781)

平清盛は神戸を平氏政権の拠点とするため、1173年より大輪田泊に風浪を防ぐ島を築き、港の発展をはかりました。築造は難工事だったため、経石や人柱の伝承が生まれました。『平家物語』には、一切経を書いた石を沈めたとあります。時を経て伝承は脚色され変容していきます。室町期の幸若舞『築島』には、30人の人柱の身代わりになった松王の説話、人柱の一人である国春とその娘の物語が記されています。

この『兵庫築島伝』は、それら書物の築島伝承と兵庫の言い伝えをまとめて、5巻にわたる物語にしたものです。著者は広島島の僧・円信で、

仏教色の濃い記述が見られます。築島の由来を中心に、清盛の出自からその最期までを『平家物語』に拠りながら記しています。円信は、清盛を功罪相半ばする人物として伝えています。



大倉山公園

神戸駅から北へ歩くこと約十五分。緑豊かな大倉山公園があります。開園したのは、明治四十四年のことです。

大倉山公園ができる以前、このあたりは、山麓にある広厳寺にちなんで広厳寺山と呼ばれていましたが、東に安養寺が建てられてからは、安養寺山と呼ばれるようになりました。明治八年に官営地となった後、大倉喜八郎が買い取り、別荘を建てました。大倉喜八郎は、政商として一代で財を成し、大倉財閥を築いた人物です。

さえぎるものなく港の景色が見える山頂の別荘を気に入り、よく利用したのは、大倉喜八郎と懇意だった伊藤博文でした。

その伊藤博文が明治四十二年に暗殺されると、大倉喜八郎は、公園とすることを条件に、土地と建物を神戸市に寄付しました。市は、隣接町からの寄付による土地も加えて、公

園設置工事に着手、明治四十四年十月に大倉山公園として開園しました。また、寄付条件の一つでもあった伊藤博文の銅像も山上に建てられました。別荘は、伊藤博文の雅号から「春畝館」と呼ばれ、戦後は老人いこいの家として使われていましたが、阪神・淡路大震災で全壊し、現在はありません。

神戸市立図書館も同年十一月に開館しましたが、当初の所在地は相生町の旧市庁舎で、大倉山公園に移転するのは、大正十一年のことになります。

大正六年には、山の中腹に三千坪余りの運動場を作り、路面の改修や芝の植付け、電燈などの設備も整えました。

大正八年の市会で、議員から次のような発言がありました。「神戸市に公会堂がないのは遺憾に思う」。大阪中之島に大阪中央公会堂ができたのは前年のことです。その後も公会堂建設について、市会で度々取り上げられました。

大正十年に、神戸市は公会堂建設の意向を固め、大正十一年に公会堂の設計を懸賞つきで公募、翌年当選者を決定しました。建設予定地は大

倉山公園です。『神戸市公會堂新築設計競技當選圖案集』（大正十三年）には、一等から三等までの当選と選外佳作の図案が収録されています。

しかし、計画はなかなか進展しないまま、昭和になりました。昭和三年、建設に向けて動きだすも、様々な事情で実現に至りませんでした。

昭和九年、「大都市で公会堂がないのは神戸市だけだ」と再び動き出し、建設場所は大倉山と決められました。

昭和十一年元旦の神戸新聞には、「大倉山上に聳り立つ百萬市民文化の殿堂」「躍進神戸のほこり東洋一大公會堂全貌」との見出しに大きな完成予想図が載っています。記事によると、約三千六百人を収容する廻り舞台つきの大集会場、八百人の宴会が可能な大宴会場などがあり、地下から五階まで豪華な施設となる予定でした。

公会堂建設敷地とするため山頂から数メートル切り下げ、銅像と春畝館もここに移されますが、戦争が勃発。政府は大規模建造物の造営を厳しく制限、またしても建設中止となりました。

戦争の影は、公園内にも落ちてきます。昭和十一年、大倉山公園が防

空陣地に組み込まれ、高射砲隊が置かれました。また、伊藤博文の銅像は金属供出され、台座だけが現在残っています。戦後、公園には戦災者住宅が建てられました。

公園が、県庁舎の移転候補地になったこともありましたが、

昭和三十四年、分散されている兵庫県庁舎を集約・効率化しようと、新庁舎建設の検討が始まりました。候補の一つであった大倉山公園案は、県議会で強く支持されましたが、その場合、代わりの公園設置が必要となり、費用が多額になることが懸念され、却下されました。

念願の公会堂は、昭和四十八年に「文化ホール」として完成。その他園内には、昭和四十七年に市内県人会の呼びかけで始まった「ふるさとの森」をはじめ、野球場、図書館などがあります。市民の憩いの場として開園してから、まもなく百年を迎えようとしています。

参考図書

『神戸市会史』（神戸市会事務局）
『楠町の今昔』日原辰之助編（楠町史蹟保存會） ほか